

垂水市「南の拠点整備」に係る基本構想

垂水市まち・ひと・しごと創生総合戦略に基づく地域創生プラン

平成28年1月
垂水市

垂水市「南の拠点整備」に係る基本構想

垂水市まち・ひと・しごと創生総合戦略に基づく地域創生プラン

目次

はじめに	2
1. 拠点整備の背景	3
(1) 対象地区の選定	3
(2) 地理的な優位性	4
(3) 交通結節点とストック効果	5
2. 地域ニーズ分析	9
(1) 候補地視察	9
(2) ヒアリング（地域商工・産業界）	13
(3) ヒアリング（垂水市の女性）	14
(4) ヒアリング（垂水高校の生徒）	15
(5) ヒアリング（地銀関係者）	16
3. 整備エリアの構想	17
(1) 地域環境	18
(2) 基本機能と発展性	18
(3) 産業振興と交流人口対策	20
(4) “遊び”開発と定住人口対策	20
4. 整備計画とパース配置	21
(1) エリア配置の考え方	21
(2) 配置構成	22
(3) 整備における留意点	23
5. 運営方針	24
(1) 地域版 DMO 創設	24
(2) 6次化産業のあり方と店舗運営	25
(3) 人材と産業の育成	26
(4) 拠点の将来像	26
6. まとめ	28
7. 参考・資料・出典	29
8. 添付資料	30

はじめに

2010年の国勢調査によれば、我が国の総人口は1億2,805万7532人（平成22年10月1日現在）¹であり、65歳以上の人口が23.0%を占め、我が国は世界で最も高い水準の高齢社会を迎えている。また、世帯構成は単身者や二世帯が半数を占める状況にあり、合計特殊出生率が1.42（平成26年〔厚生労働省〕）のまま改善されなければ、将来の人口減少はさらに加速すると言われ、我が国全体の経済活動のみならず、地方経済や地域コミュニティに対する影響が懸念されている。このまま人口減少が続けば、2060年には、国の人口は9,000万人あまりになり、高齢化率は40%近くの水準になると言われている。

このような状況において、垂水市も少子高齢化が進んでおり、地域活動や地場産業における必要な労働力が不足するなど影響を及ぼしている。市の人口動態を見れば、20年以上も自然減、社会減²が続いている。特に、高校卒業後の人材が、進学、就職によって流出する構図は、若手人材の不足を慢性的に引き起こす原因となっており、出産や就職・就業によって一度転出した人を再び転入するよう促すなど、転出への歯止め、Uターン施策は急務となっている。

そこで、垂水市では国の地方創生の動きに合わせ「垂水市まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定した。基本的な考え方は、人口減少に歯止めをかけ、東京圏への人口の過度の集中を是正するものであるが、定住人口と雇用、そして交流人口を増加させていくことが必要とされている。

今回、その総合戦略を具体的な成果に結びつける一つの施策として、垂水市は「南の拠点整備」を進め、国道220号線、垂水フェリー航路、大隅縦貫道整備と将来の横断道路による交通の結節点としての地の利を生かし、垂水市全体の産業・観光振興を実現するものである。

¹平成22年国勢調査（総務省統計局）

²垂水市 統計たるみず（平成26年版「人口動態の推移」）

1. 拠点整備の背景

拠点整備の目的は、人々が交流し、地域の商材が販売できる場所をつくることで、6次産業化と観光振興を具体的な形やシーンにすることにある。

現在、垂水市の交通の流れは、国道220号線、垂水フェリー、そして大隅縦貫道と3つの主要交通路に囲まれている。今後、大隅縦貫道は志布志方面の開通が進み、高速道路網の整備が進むことで物流網は発展するが、車両の通過だけでは地域経済を発展させることはできない。既に垂水市には「道の駅たるみず」が整備され、年間入込数123万人（平成25年度）に達し、当該地区（牛根麓）の1日の交通量は5,219台³となっているが、垂水市の北側に位置しており、垂水市全体の回遊性や経済効果を充分生み出せないでいる。

一方、新城宮脇では13,922台⁴と牛根麓に比べて約2.6倍の交通量がありながら、これらの交通量を活かす拠点がなく、また観光客の流入を促す魅力ある施設も道路沿いに存在していない状況にある。

こうしたことから、国道220号線を行き交う交通量を活かしつつ、「通過点」から「目的地」として垂水市に立ち寄り、ヒトとモノの流れ受け止め、地域経済を刺激する拠点整備を計画するものである。

(1) 対象地区の選定

拠点整備をするにあたり、生活並びに物流のメインとなる国道220号線のどの地域を整備対象とするか、その選定方針を予め示しておく必要がある。前述のとおり、垂水市には3つの大きな交通の流れがあるが、これらが結合し、物流、生活移動から観光振興まで多層的に交通路が活用されるような拠点をすることで、大隅半島全体の交通結節点として垂水市が機能することが求められる。

既に整備が進んでいる道路と、今後の道路整備計画を考慮しながら、ヒトとモノが行き交う道路が地域資源を産業化させる「資産」と考え、これらの交通往来の「ストック効果」を最大化させるよう、整備計画と開発地区が選定されなければならない。

従来、「南の拠点」といえば、垂水市では「新城地区」が地理的にあたり、まさかり海水浴場等を踏まえて「市の南側を拠点開発する」という見方も存在してきた。当該地区の地域振興ももちろん大切な市の課題ではあるが、本拠点整備においては、「南の地区」ととどまらず、佐多岬にまで至る「南方面の往来」や大隅半島を横断する東西の交通流入も考慮にいれなければならない。

³ 平成22年度道路交通センサス

⁴ (同上)

したがって、地区の選定は「交通の流れ」を再優先としながらも、拠点の地域振興や産業支援などの施策は、東方面は猿ヶ城や大野地区まで、南方面は新城地区まで、地域住民の利用ニーズと参加を促す形での運営及び利活用を考慮したものとするのが望ましい。

こうした状況を踏まえ、「南の拠点整備」の開発地区は、垂水フェリーからの交通流入があり、国道220号線とも接続する「浜平地区」が「交通結節点」として有利な位置にあり、また今後大隅縦貫道と垂水フェリーのある港と接続する横断道路整備も進むことで、大隅半島の東西南北の交通要所として機能することができる最も適した地区であると考えられる。

[整備対象エリア：浜平地区（オレンジ色）区画] ※エリアには既存住宅が含まれる



これにより、垂水市の東西南北に行き交う回遊性を実現するとともに、道路整備計画の進展にともなって、大隅半島の全域への回遊性を確保し、地域振興に資する拠点整備となることを期待するものである。

(2) 地理的な優位性

本拠点整備の対象エリアとなる「浜平地区」には、次のような地理的な位置づけでの優位性を持っている。

主要な3つのルートとの「接続性」

☑垂水フェリーによる桜島ルート

大隅半島からの一次、二次産業の物流の往来、並びに鹿児島市側からの観光流入経路、さらには大隅半島の住民が買い物や通院・通学などの生活道路として定着しており、大隅半島と薩摩半島の往来に不可欠なルートである。

ただし、大隅縦貫道の開通によって、フェリーの料金体系が乗船人数によるところから、団体旅行やスポーツ試合等の移動は時間を要しても高速道路を活用する流れが増えているとの声もあり、道の駅整備を中心とした休憩・食事の機能が拠点に整備されることで、ルートの利便性や多様性を向上させることが期待される。

☑大隅縦貫道の高速道路ルート

平成 26 年 12 月 21 日より、大隅縦貫道が開通し、東九州自動車道と接続したことから、宮崎並びに熊本方面から鹿屋までの高速道路によるアクセスが向上した。これが東側に延伸され、志布志と接続するルートができ、大隅半島への交通流入の増大が期待される。ただし、道の駅の多くは大隅半島の南方向にはまだ十分整備が進んでおらず、休憩施設や情報提供の拠点が求められる状況にある。

☑220 号線を海岸線に通る一般道ルート

地域の生活道路としての位置づけから、路線バスの運行並びに錦江湾から海岸線を通る観光ルート多様な利用者が存在している。特に垂水市から見る桜島は、その稜線が端から端まで綺麗に一望できる位置にあり、季節や1日の時間変化による見え方の変化が観光資源として現在は充分活用されていない。一方で、大雨や台風などによる降水量が増大した際には、土砂崩れなどの災害も度々発生しており、適切な情報に基づく交通ルートの誘導や待機・退避場所などを整備することで、大隅半島の回遊性を担保することが、交通と経済の往来を維持し続けることになる。

(3) 交通結節点とストック効果

道路の流れをつなぐことは、単に生活や経済の利便性を向上させるだけではない。災害等住民の安全や安心が失われるような事態においても、複数のルートが構築され、安全に回避、退避できることによって、生活ライフラインは維持し続けることができる。

「減災」を実現する地域レジリエンス（強靱化）対策

先の東日本大震災においても、高速道路並びに国道の整備によって、円滑な避難誘導ができたばかりでなく、復旧や輸送の平常化に向けても大きな役割を果たした。この垂水市においても、活火山として活動が監視されている桜島の降灰によって、視界不良や通行の妨げとなるドカ灰（火山灰が大量に降り注ぐこと）が起こることによって地域住民だけにとどまらず、物流や観光の流れまで止めてしまうことになりかねない。現に、「道の駅たるみず」では、気象庁の火山噴火警報の警戒レベルがあがったことで、風評被害を受け、来訪客が減少するなど、風評被害も発生している。

国土強靱化（ナショナル・レジリエンス）とは、今後起こり得る大規模災害などに対して、

- ・人命を守り、
- ・国家及び社会の重要な機能が致命的な障害を受けず、
- ・国民の財産及び公共施設の被害を最小化し、
- ・迅速な復旧・復興を可能とする、

強くてしなやかな国をつくるということです。

出典：ナショナルレジリエンス推進協議会「国土強靱化の目的」より

一方で、桜島の雄大な景色と火山灰が地層に堆積したことによって得られる豊かな水資源といった恩恵も受けており、こうした自然と向き合い、災害は起こりうることを前提として甚大な被害が起こらないよう常日頃から備えておく「減災」の考え方をもちつことは、災害の多い日本の国において重要な考え方である。

それは、人命を守るだけではなく、いかなる事態が発生しても機能不全に陥らない経済社会のシステムを確保することで、災害に負けない、強い地域をつくることができる。

その点では、降灰による通行規制エリア想定を考慮すると、既に整備されている「道の駅たるみず」が大規模な降灰時には、通行規制区間の中心に入ってしまう、万が一の際には地域の特産物や休憩・駐車スペースが機能しなくなってしまう。また、短時間に多量の降雨が発生する際には、国道220号線が通行止めになるが、この際も迂回ルートがない状況では、車は立ち往生し、物流や生活移動に多大なる支障をきたすことになる。

したがって、国道220号線、垂水フェリー、そして将来の大隅縦貫道とつなぐ横断道路整備の交通結節点となる「浜平地区」に拠点を整備することに寄って、道路の交通結節点としての機能を有し、災害に強い地域のレジリエンス（強靱化）を実現することができる。また、拠点を通して適切な情報提供並びに駐車等待機拠点となることで、物流網を止めることなく機能させることで、地域経済を災害に負けない強いものにしていくことが可能である。

[桜島噴火による通行規制区間]

「桜島は近年、日平均で3回程度の爆発・噴火が起きており、国道224号は降灰による全面通行止めが発生しています。」



出典：東九州自動車道（鹿屋串良JCT～曾於弥五郎IC），大隅縦貫道（串良鹿屋道路）開通のお知らせ 国土交通省平成26年11月13日プレスリリースより）

大隅半島の道路網整備によるストック効果

大隅半島だけにとどまらず、九州全域に国が進めてきた道路整備網が存在する。九州各県に広がる高速道路がそれに当たるが、これが九州一円をつなぐように完成に向かいつつある。こうした道路整備が進むことで、九州圏内の交通アクセスが向上するだけでなく、物流から人の移動に至るまで移動時間の短縮が進み、経済圏が拡大することになる。これが、道路整備によって地域に経済効果をもたらすストック効果である。



ストック効果：道路が整備され供用されることで、人流・物流の効率化、民間投資の誘発や観光交流、人口・雇用などを増加させ、長期にわたり経済を成長させる効果

出典：国土交通省

東九州自動車道と接続する大隅縦貫道の整備・開通であるが、これはは鹿児島県の「大隅地域将来ビジョン」において、観光地“大隅”に容易にアクセスするための高速交通網に位置付けられている。

これにより、大隅半島の縦方向での往来を進め、農畜産物の鮮度輸送を実現する上で輸送時間を短縮させ、地域経済へプラスの効果をもたらす。一方で、観光資源の開発や誘致、交流人口を増大させるためには、横方向（図中オレンジ色）での往来が進むことが重要であり、大隅縦貫道の志布志との接続だけにとどまらず、垂水フェリーのある垂水港まで、大隅半島を縦断する道路網が将来にわたり整備され、一般道に交通往来が進むことで、観光地を周るスムーズな回遊性を生むことができるのである。

[大隅縦貫道により注目される主な観光地]

- ① 垂水の千本いちよう
- ② 大隅湖
- ③ 鹿屋航空基地資料館
- ④ かのやばら園



出典：東九州自動車道（鹿屋串良JCT～曾於弥五郎IC），大隅縦貫道（串良鹿屋道路）開通のお知らせ 国土交通省平成26年11月13日プレスリリースより）

以上が、交通網の整備と活用を目指す拠点整備の背景である。

2. 地域ニーズ分析

交通網の整備状況並びに交通結節点としての機能、ストック効果を最大化させる上で、垂水市の浜平地区が有効な拠点整備の地理的条件を備えた土地であることは説明の通りである。この拠点に開発を進めるにあたって、現在の候補地の状況と、地域住民が抱えるニーズをヒアリングし、どのような設備構想や機能を持つべきか分析を行った。

(1) 候補地視察

候補地となる「浜平地区」の現在の状況について視察した内容は以下のとおりである。

【候補地の位置づけ】

エリアは国道 220 号線に隣接しており、現在は民有地と畑、店舗（現在は営業していない）等となっている。木や雑草によって、道路側からは見づらいが、海沿いにいくと堤防のすぐ先が砂浜となっており、夏季の遊泳やマリンスポーツなど楽しめるような環境にある。

また、地域住民によれば、消波ブロックの手前までイルカがやってくるなど、風光明媚な環境にあり、観光資源としての地域の風景を活用することも充分可能である。



〈薩摩明治村展望台より候補地エリアを南東方向に撮影〉

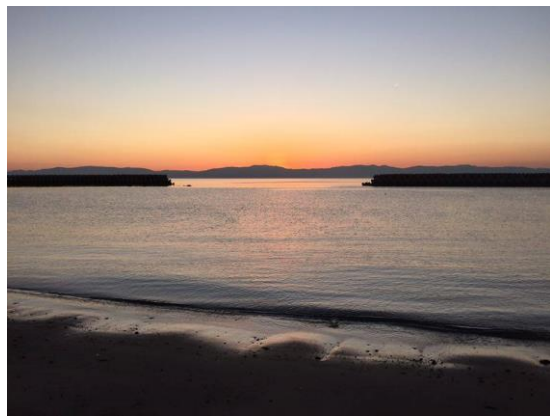
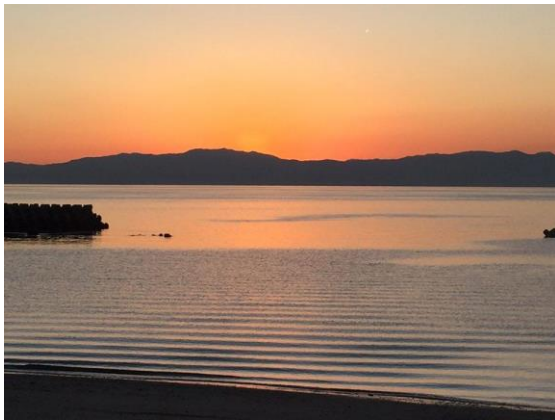
日中から夕方にかけて気候も晴天時には穏やかであり、心地良い印象を受ける。また、錦江湾を望む海岸線の中で、180度の開けた視界に桜島が見られる箇所は少なく、雄大な景色を堪能できる観光スポットとしても有望な場所である。地域住民には当たり前の景色が、観光客にとっては「非日常」になる。そうした潜在的な場所やシーンが浜平地区を含めた垂水市全体にまだ残されており、外部人材との交流を含めた観光資源開発が期待される場所である。



《候補地エリアの海岸線を南北方向それぞれ撮影》

候補地の防波壁の前には草が覆い茂っているが、わずかながら浜辺が存在している。消波ブロックまでは海底は浅いため、海と一体化となった拠点開発が可能となる。現状の水質と安全性確保に対する措置は調査及び対策が必要と思われるが、砂浜の特性を活かす開発が望ましい。

(なお、防波壁を超えて海岸に出ることや、防波壁にかかる建築物に対する設置の有無、許可及び安全性に対する承諾及び許認可等は、今後の整備計画の中で関係各所との調整が必要である)



《候補地エリアの海岸線から夕陽を望む方向を撮影》

交流人口を増やし、地域への経済効果を高める。それには、土地を訪れる「目的」がなければならない。西側が海に面した候補地は、夕陽が海面に照らされ、一面がオレンジ色の美しい風景画のような景色が広がる。

当該候補地の夕方の景色は素晴らしく、右手に桜島、左手に開聞岳を望みながら西の空に太陽が沈んでいくオレンジ色に染められた錦江湾の絶景を見ることができる。こうした都市部では決して見ることでできない自然のダイナミズムが生み出す風景美は土地の特性として大変魅力的なものであり、地域の人だけでなく、多くの市外、県外、また国を超えても惹きつける誘引要素となる。



《海岸線から錦江湾を眺める美しい景色》

美しい海辺の風景を身近に感じられるだけで、観光資源としては十分なものである。緩やかに寄せる波が作る二度と無い風景は、その時、その場にいる人間でしか体感できないものであり、訪れる度に違った印象を与えてくれるものになる。こうした自然とのふれあいや接点こそが、地域に生活する人々の癒やしや気分転換となり、親しみを与える要素となる。



《現地から北側方面に向けて撮影：桜島と錦江湾が一体となった美しい稜線》

以上のように、地域の景観がもつ自然の観光資源を有効に活かし、地域住民の憩いや観光客の心の琴線に触れるシーンを「魅せる」ように拠点整備を行うことが肝要である。

【候補地の道路状況】

候補地が面する主要な道路は国道 220 号線となる。日中から車の往来が激しく、拠点が整備され、右左折の車が滞留すると交通渋滞を引き起こす可能性がある。



《候補地の歩道から垂水市役所方面（北向き）に撮影》

当該地域には拡幅工事された歩道があり、拡幅工事等を含め、歩道をセットバックさせ、拠点整備後、交通流入が多いと見られる垂水フェリーのある北側からの下り車線に右折専用レーンを設け、直進の交通の流れを止めないように配慮することが望ましい。

（なお、交通整備については、国土交通省九州地方整備局と、交通渋滞への影響や国の道路整備計画、また災害における緊急輸送路等の運用方針と協議の上、対応策を検討する必要がある）

地域住民ニーズヒアリング

なお、地域住民のニーズをヒアリングするため、11月30日、12月1日の2日間にかけて、以下の異なる属性の方々に、拠点整備について伺った。

主な質問項目としては、次の3つの質問を中心に行った。（なお、現場の回答や雰囲気によって質問の切り口や表現を対象者属性によってその場で合わせている。）

- ① 垂水市の魅力はなんですか？
- ② あなたはどのような余暇の過ごし方をしていますか？（平日、休日）
- ③ これからの「垂水市」はどのような「まち」にしていきたいですか？

(2) ヒアリング（地域商工・産業界）

対象者：商工会、観光協会及び漁協関係者

Q：垂水市の魅力は？

- ・自然に囲まれた風光明媚な風景（錦江湾と桜島）、観光は猿ヶ城溪谷など、自信をもって過ごせる町。過ごしやすい気候・海が近い。
- ・良い食材（カンパチ&焼酎）、新鮮なものがある。野菜類もご近所に取れたものが手に入る。絹さやいんげん日本一、海にカンパチ・ブリが日本一の生産を誇る
- ・地域の郷土菓子（かるかん、いももち、草餅）があり、お菓子は買わず、外食はせず、みんな一緒に食べる
- ・人情味のある人々。人間らしい力を回復させる地元の人間の暖かさ。食が乱れていて、親とも食事をしない子どもたちが、修学旅行等でやってくる。一緒に食事をすると涙目になって嬉しくなって帰っていく

Q：垂水の課題・問題は？

- ・材料だけで加工が足りない。一次産業が潤わないことには、二次、三次と広がらない。メディアに出ても、地域のものを売る場所がない。観光バスを止めて売る場所がない
- ・桜島噴火レベルがあがることで、修学旅行シーズンにキャンセルが相次ぐ
- ・高齢化が進むが、車がない（運転できなくなる）。地域の高齢者向けの巡回コミュニティバスの運営してほしい
- ・せっかく都会から田舎に帰ってきてても、タクシーで2,000～3,000円かかる離れた集落の人たちが買い物にいけていない。お年寄りがどこかで（生活商材を）買うタイミングが欲しい。年金4万円で2割、3割交通費にもなる。

Q：余暇の過ごし方は？

- ・買い物は鹿児島や鹿屋まで足を伸ばしている
- ・ファストフードがない。本屋がない。本はアマゾン、楽天で買う。鹿屋に買いに行く。

Q：どういうまちにしていきたい？

- ・60歳もまだまだ現役。技術を活かしていける拠点、特技の継承。70歳、80歳でも現役でいられる。
- ・私は垂水市が好きだ、と思える拠点を作って欲しい。垂水で一生過ごしたい。高齢者が楽しんでもらえる構想にしてほしい。

(3) ヒアリング（垂水市の女性）

対象者：垂水市に住む 20代～60代までの地域で活躍する女性

Q：垂水市の魅力は？

- ・海と山が近い。景色がいい。魚釣りができる。山もすぐ。自然が近いのが魅力的。
- ・桜島はこちら（鹿児島市側よりも垂水市）から見るほうが美しい。天気の良い日にはイルカが見える。開聞岳が見える。
- ・作物を育てやすい。作物の幅が広い。（垂水市は）南北に長い。（台地の）上のほうは高原野菜が作れる。
- ・上野台地から見ると、桜島、開聞岳、千本いちょうなどグルっと見渡せる
- ・地域的に温かい気候。過ごしやすい。温泉も湧き出る。
- ・水。コーヒーを入れる水、蛇口をひねってすぐ飲める。コーヒーを入れた時によく分かる。温泉水で入れると各社味が違う。掘っている深さによって味が違う。
- ・年配の方がすごくパワーがある。熱意をもって仕事に打ち込んでいる

Q：余暇の過ごし方は？

- ・温泉に入る。明治村に行く
- ・車でどこでもいける。鹿屋から鹿児島まで。（垂水市は）アクセスがよい
- ・改めて余暇なんて考えてなかった。仕事しながら休みを取る。
- ・外食は、大関寿司、はいから亭、ファミリア、遠くは鹿屋、国分、霧島まで足を伸ばす。
- ・（新しいお店などの情報は）ネットで調べる。見つけてすぐなら3人ぐらいで行く。5～6人ぐらいで行くときも。旦那意外と食べに行く。

Q：どんなものがあれば魅力的ですか？

- ・バーベキュー場、親子で遊ぶ公園、家族風呂
- ・スイーツバイキング、テイクアウト、お惣菜など（ちょっと買い物するのに、外に出るときは化粧をしなければならないので）ドライブスルーで変えたら良い。
- ・遅い時間 夜10時ぐらいまでやっている店が欲しい
- ・何か地域で習い事がやりたい。ちょっと参加できるイベントがあったほうがいい。
- ・婚活イベントやってほしい。地域のおせっかいおばさんもいる

(4) ヒアリング（垂水高校の生徒）

対象者：垂水高校の1年生～3年生までの男女

Q：垂水市の魅力は？

- ・ぶり、かんばち（だけど値段が高い）
- ・魚釣り（ルアーフィッシング）ができること。魚種もひらめ、ぶり、かんばちと幅広い。

Q：肉と魚どっちが好き？

- ・肉派が10名中8人（豚2名、鶏肉6名）。いのししは臭い

Q：どんなお店や場所に普段行っていますか？

- ・ジョイフル（6名）：安い、ドリンクバーで券を使って [199→130円]
- ・いつき：昼はラーメン、夜は居酒屋 [ラーメン500円]
- ・放課後は、市の体育館、タイヨー、ローソンにたむろすることが多い
- ・カラオケは鹿屋に行く。バスに乗って行く
- ・本屋：小説、コミックを鹿屋の本屋に買いに行く
- ・勉強するのは市立図書館に行く。結局メンバーは学校と同じ。

Q：日常の課題や悩みは？

- ・街灯800mに一本しかない。夜道が怖い。
- ・バス時間が開きすぎる。国分、牛根方面のバスは3時間に1本。1時を逃すと次は4時になってしまう。仕方がないのでそれまで靴箱の前で一人待つ。

Q：垂水に欲しいものは？

- ・ゲオ（レンタルビデオ）が切実に欲しい
- ・垂水は電波が悪い。Wi-Fiスポットを作って欲しい。
- ・（住んでいる近所の）下水道が溝に流れる匂いが臭い。道路の整備をして欲しい。
- ・気軽に買える（ハンディフードのような）ものがほしい。スタバが欲しい。おしゃれなカフェで勉強してみたい。

(5) ヒアリング（地銀関係者）

地域に密着し、地域に根ざした経済活動の潤滑油となる資金需要に応える垂水市の銀行関係者に地域の景況感並びに課題について伺った。なお、質問順序は順不同である。

Q：垂水市の地域の景況感について見解を教えてください。

〔南日本銀行〕食がメインではあるが、厳しい状況。資金需要や新しい設備投資が出てこない。個人住宅を作られる人が少ない。アパートについても人口減で空きが目立つ。高齢化に伴う年金等によって、預金量は自然増している。

〔鹿児島興業信用組合〕漁業、温泉水、養豚関係が多い。遊ぶところがなく市外に流出している。ゴルフはあるが、衰退している。リスクを抱えながら疲弊している人が多い。

〔鹿児島相互信用金庫〕特別なイベントやスポットがない。ホテルがない。人が減って労働人口も減っている。垂水の資源をつかった道の駅を作り、農業も直接（消費者や販路を）開拓出来る形が望ましい。

〔鹿児島銀行〕市の平均年齢55歳。少子化進んでいるという実感がある。市の人口も15,000人程度だが、ブリ・カンパチの生産は高い。売り方が下手。ブランド化が思ったより進んでいない。100gで400円を切るぐらいになってしまっている。

他の市町村に比べると、余地はまだある。他市町村は基幹産業を持っていない。地元産品、焼酎の蔵。酒の文化もある、自然もあるが情報発信されていない。高隈山は大隅半島で一番高い山だけど、登山客がいない。観光資源はあるが、発信がされていない。ゾーンでとらえたときには、九州全体でみたら決して悪い立地ではない。

Q：拠点整備にあたり期待するものは？

・若手のマインドを高める。やる気があるところはどんどん出展させる。試験販売の取り組みについては、食の商談会を実施しており、チャンスがあるが、首都圏の百貨店の求めるレベルのものが少ない。ギャップがある。育成が重要である。事業者のモチベーションをどのように高めて出口を作っていけるか。（鹿児島銀行）

・高齢者、ユニバーサル Design 等の配慮をした設備計画（南日本銀行）

地域住民ニーズヒアリングまとめ

☑地域住民は自然豊かな環境を「魅力」と感じ、日常生活を取り巻く豊かな農産物とともに満足した生活を送っている。

☑しかし、「魅力」がありながら観光資源化やPR、情報発信はされておらず、地域の景観や自然は地域に埋もれてままになっている。

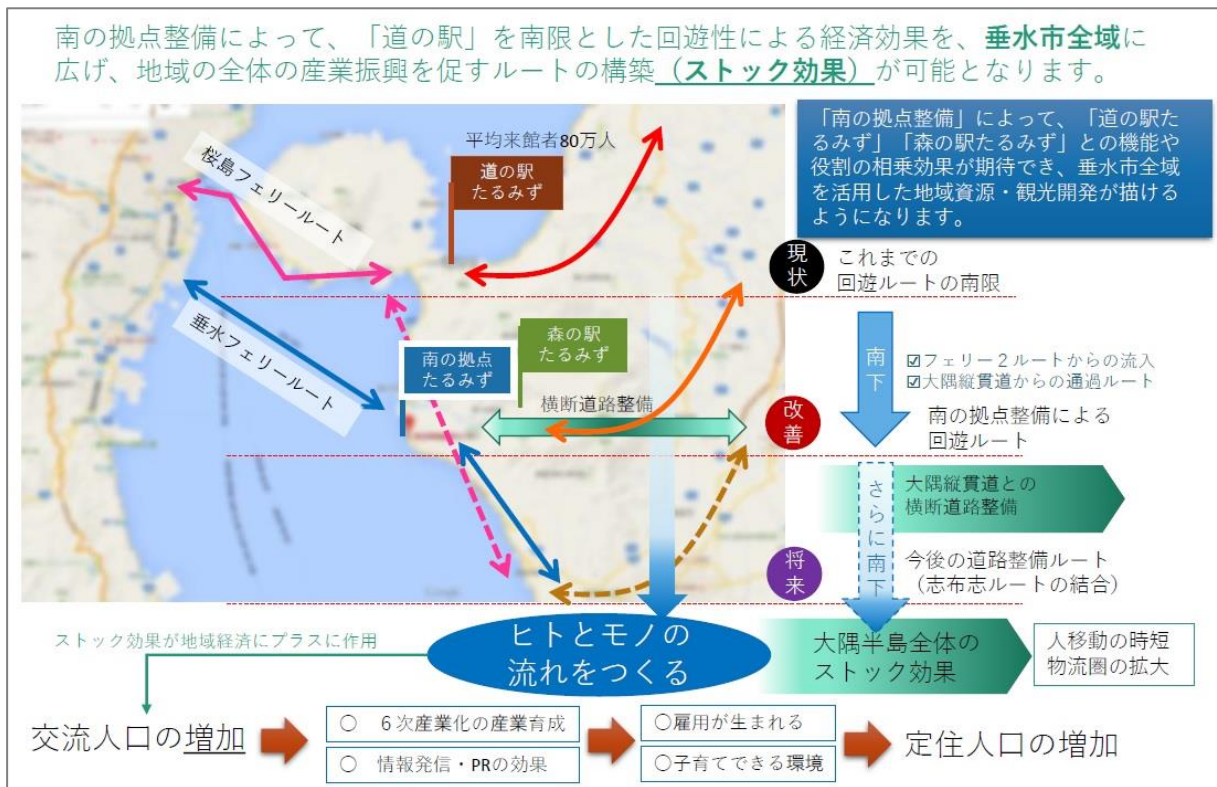
☑また、地域住民の余暇や遊びは「市外に流出」しており、地域の活気や経済に寄与していない。

3. 整備エリアの構想

これまでの現地視察及び地域ニーズのヒアリングを通して、拠点整備には次の視点が重要であると考えます。

- (1) 地域を往来する交通の流れを「結節点」としてつなげ、ヒトとモノの流れを垂水市に引き寄せる。
- (2) 自然豊かで魅力的な観光資源の開発、整備・情報発信を通して、「交流人口」の流入を促す。
- (3) 豊かな資源と生産物（農業・漁業・畜産等）の集積と地域住民の交流を促す”遊びの拠点“を開発することで「定住人口」の定着・増加を促す。

以上3つのポイントを加味し、整備全体の構想を次のような構図として取りまとめるものとする。



《南の拠点整備によって期待する効果と目標》

また、本拠点整備は垂水市の南への往来並びに市の全体への経済波及効果・雇用促進、定住人口の増加を目標とすることから、拠点整備に合わせ、既に整備されている「道の駅たるみず」「森の駅たるみず」と互いの機能や役割について相互補完、相互送客できるように配慮した計画・連携施策を講ずることにより、3つの地域振興を支える拠点が有機的な連携を図るようにすることが重要である。

(1) 地域環境

整備拠点の浜平地区の現在は、住宅エリアであり、農作物など作られている場所である。車の往来に拠る騒音はあるものの、拠点整備に寄って周辺の豊かな自然との不調和、また生活導線に不便さを新たに発生させないために、周囲との景観や交通量増大に拠る安全の確保など十分な配慮が必要とされる。

垂水市浜平地区の学校給食センター北側のゾーン一体を機能別に整理し、整備を行う。
また、本整備を通して周辺環境の賑わいを創出し、地域一帯のなったエリアの発展を目指す。

歩道の拡幅部分をセットバックし、北側からの交通に対して右折レーンを設置することが望ましい。
(流入しやすさ & 渋滞対策)

間口が広く、南北どちら方向からでも視認性が高い土地である。また、海辺まで開発が可能であり、拠点の個性を活かしたゾーニングができる。

※エリアはあくまで候補であり、現民有地とは協議・交渉が必要。

当該エリアを道の駅に必要な機能も有する形でゾーニングし、必要な機能を配置し、拠点整備の計画を具体化させるものとする。主な機能を分布させたものは上記の図に示した通りである。

(2) 基本機能と発展性

拠点は地域ニーズを踏まえた上で次の3つの要素を持つゾーンから成り立つ構成とする。なお、各ゾーンは一斉にスタートさせることが望ましいが、開発の優先順位や整備置ける認可等必要な手続きの進捗に寄っては、段階的な開発になることも想定したうえで、建設計画を立てることも視野に入れるものとする。

■レジャー・遊びゾーン

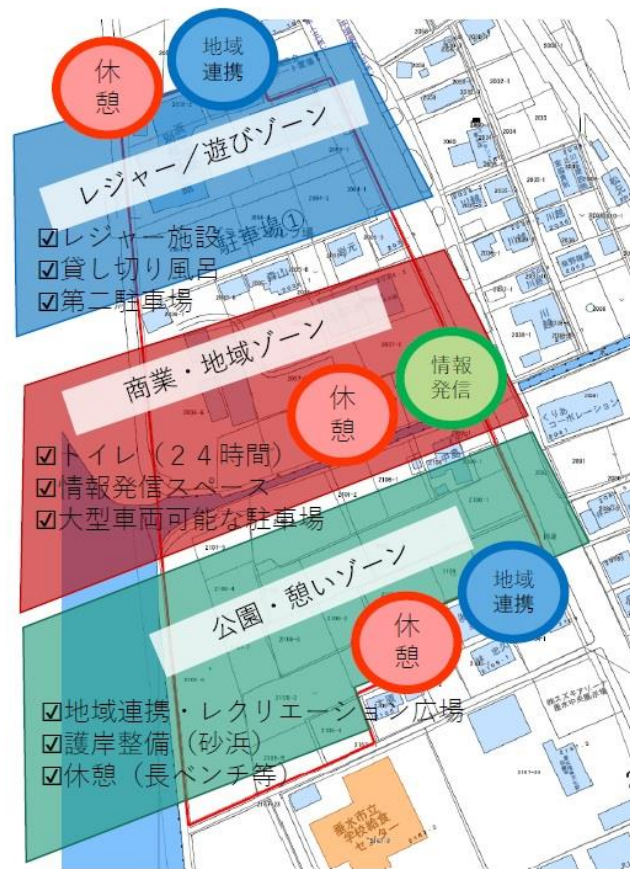
地域住民の「遊び」や観光客の「レジャー」を中心とした整備を行い、民間投資を呼び込む。

■商業・地域ゾーン

道の駅に資する拠点整備を行い、地域物産・トイレ等設備・地域情報の発信・交流を目的とした整備を進める。

■公園・憩いゾーン

景観と地の利を活かした、子育て世帯から高齢者まで、幅広い世代が楽しめる憩いの場としての公園整備を進める。



なお、エリアゾーニングにおける留意点は、交通、建物、事業継続性の観点で配慮・検討を行うものとする。

[交通に対する配慮]

- ☑交通渋滞等への道路アクセスのスムーズさ
- ☑乗用車からバスまで多様な駐車スペースの確保
- ☑自動二輪や自転車など二輪専用スペースの確保
- ☑バスなどの公共交通機関と民間利用の動線分け（森の駅たるみずとのシャトル運行を想定）

[建物に対する配慮]

- ☑バリアフリーだけでなく、親子が安心して過ごせる空間と動線であること
- ☑「桜島の雄大さ」「錦江湾の海辺」「西向きの夕陽」など、景観を最大限活かす、調和の取れたデザインと建屋であること

[事業継続性への配慮]

- ☑各ゾーンはニーズやトレンドに合わせて改善・改良をさせていくことを前提とすること
- ☑ゾーンにおける費用や成果についてKPIを設定し、拠点運営が評価できるようにすること

(3) 産業振興と交流人口対策

拠点整備は単なる道の駅や公園としての建屋が出来るだけでなく、地域経済に密接に関わり、産業振興を促すように機能を備えなければならない。地域の資源を活かし、6次化といわれる付加価値創造のためには、「売れる」ための力をつけ、交流人口を呼び込まなければならない。

なお、地域資源の付加価値を向上させる上で、考慮すべき3つの視点は次の通りである。

「地域資源を活かす」：地域の特徴を理解し、商品の企画・設計、製造、販売、広報・PRまで含めたプロデュース能力を地域に居ながら身につけられる。

「売れる力を鍛える」：商品の改善・改良を進め、売れるための要素や売り方への工夫を学び、市場における競争力を高めていく。

「魅せる・創る観光」：地域に存在する観光資源をどのように「見せる」ことで、観光客を「魅せる」ことができるのか。多様な見方で地域の魅力を高めていく。

これらを具現化し、拠点整備に活かすために次のような想定設備・機能を有する

↓ (想定設備・機能)

「マルシェ」「レストラン」「研修施設(人材育成プログラム含む)」「カフェ」「チャレンジショップ」「キッチンスタジオ」「多目的スペース」

(4) “遊び”開発と定住人口対策

住民ニーズヒアリングでも明らかになったが、垂水市には地域住民が「遊ぶ」ための場所がなく、余暇や日常のリフレッシュがほとんど市外に流出している。

そこで、地域住民が日常生活の中で立ち寄り、リフレッシュや気分転換が図れるようなスペースや場所、さらには休日に楽しむ「遊び」としての役割、さらには遠方の友人や知人、知り合った方を垂水市に呼んでもてなすことのできる機能を有することで、地域住民を日常から余暇、休日までできるだけ垂水市で楽しんでもらうように整備計画を立案する。

垂水のサードプレイス(第三の場所)：観光客から定住者まで、レジャーや遊びが楽しめる場所として、通年の賑わいを演出することができる。

↓ (想定設備・機能)

「貸し切り風呂」「マリンスポーツ施設(道具レンタルやシャワールーム等)」「運動場(テニス、フットサル、ガーデンゴルフ等)」「キッチンスタジオ」「レクチャールーム」「子育てカフェ」「BBQ・グランピング」「ピクニックスペース」「子ども公園(遊具)」「無料Wi-Fi」「ベンチ・長椅子」

4. 整備計画とパース配置

これまでの地域の状況と求められるニーズから、南の拠点整備の基本整備計画は次のような方針とする。

「老若男女、地域住民、観光客、みんなが楽しめる公園をつくる」



南の拠点 整備イメージ図（錦江湾から浜平地区を望む）

地域に不足している機能は、地域住民が集える「場所」であり、年齢層が多様に交わり、垂水市に住む住民という「豊かな人材」を実感出来ることが重要である。これらを実現すべく、エリアの配置及び建屋整備について次のように整備が進められることが望ましい。

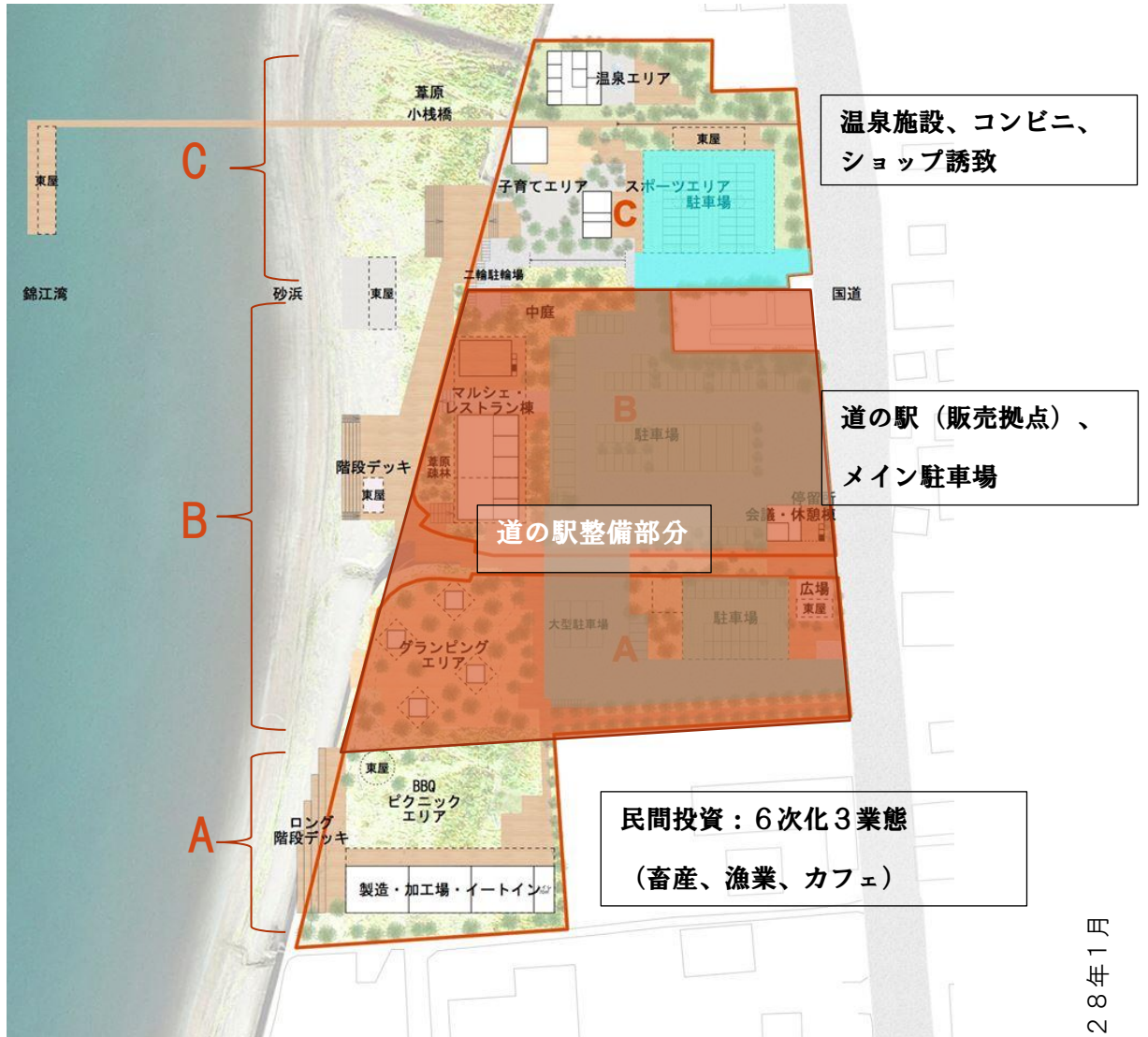
(1) エリア配置の考え方

整備エリアの配置については、地域住民のニーズと観光・地域振興を踏まえ次のような考え方で配置計画を立案している。

- ① 垂水の自然資源である、海からの砂浜や葦原、山からの緑、建築要素であるデッキなどをひだ状に絡ませることにより、海・山・建築が混ざり合い、様々な居場所をつくる。
- ② 敷地全体を、老若男女、地域住民、観光客のための「みんなが楽しめる公園」とする。

(2) 配置構成

主にエリアを機能によってゾーン分けし、次の3つの視点から配置構成を検討している。



南の拠点エリア構成案

① 交流人口と定住人口の共存

定住人口のために、多様な居場所をつくることを基本的な方針とする。

日常的に過ごす場所や、特別な日に過ごす場所、様々な場所が、敷地全体で共存できる計画となっている。また、デッキスペースでは、どこからでも桜島・錦江湾が望める見晴らしの良い風景を生み出し、定住人口・交流人口ともに記憶に残る、大きな魅力になると考えている。

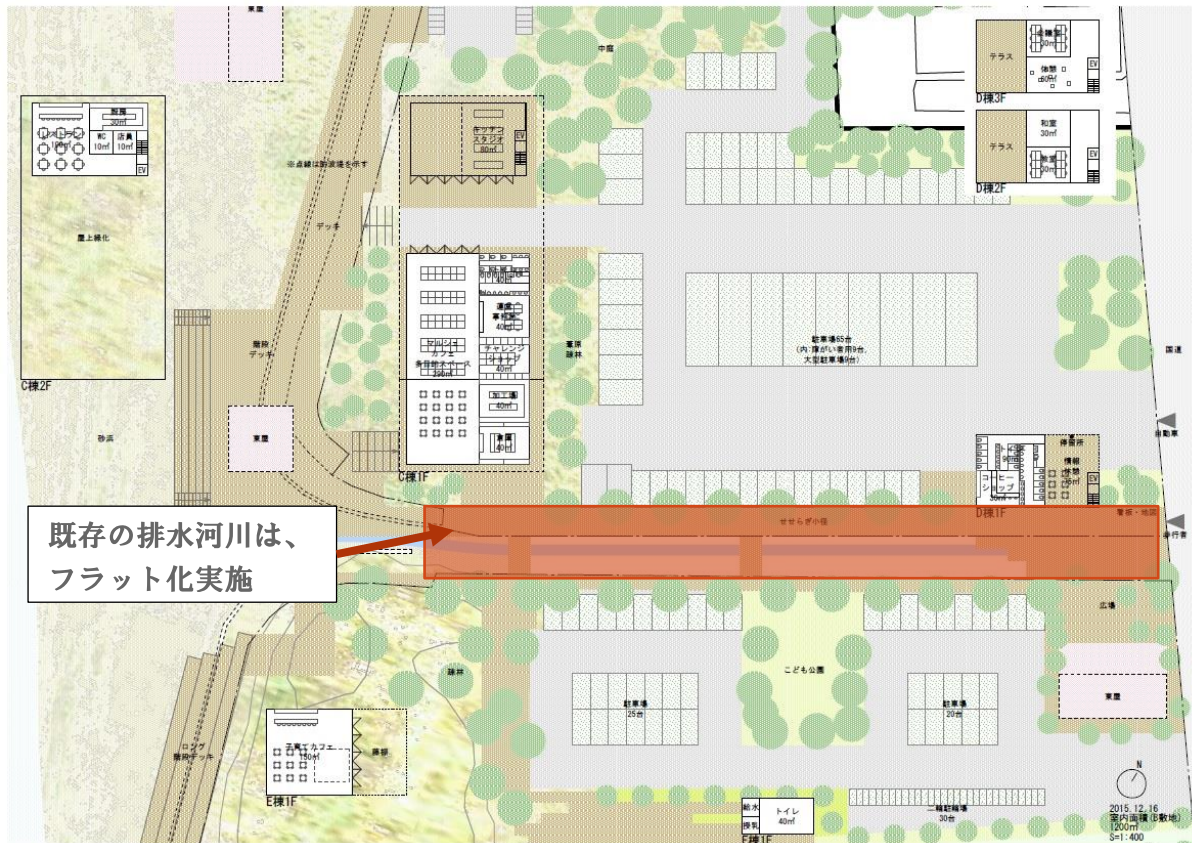
② 子育て世代の”遊び”と”集い”を作る

敷地A及びCは、子育てゾーンとして位置付ける。子供が思いきりあそべる公園・小さなカフェ・休憩所を配置する。全体的に、コンパクトな公園を分散配置する計画としている。ま

た、駐車スペースも緑化舗装をし、特に敷地Aの駐車場では、フットサルコート(テニスコート)としても利用できる想定としている。(道路整備及び駐車確保等検討必要あり)

③ 垂水の「昔」と「これから」の原風景を作る

いわゆる建築物と駐車場といった「道の駅」ではなく、敷地全体が「公園」となることで、様々なシーンが展開される。誰もが居場所をつくれる環境をつくることにより、それぞれにとっての原風景の創出を目指す。



南の拠点エリア 販売拠点・建屋計画

(3) 整備における留意点

① 敷地境界を越境する要素について

海岸沿いの歩行デッキ、栈橋、東屋、砂浜のテラスは、敷地境界線を越えて、砂浜と一体的に計画している。デッキは、原風景を作り出す場としての大切な施設であるが、建設地の所有者への協議や許可の必要など課題がある。

(2) 分棟型の建築

建築は、多要素のランドスケープに呼応するよう計画するので、分棟型が望ましいと考えている。一方で、プログラムや管理上の問題、建築基準法上の問題(細かい話となるが、原則一敷地一建物のルールがあり、複数建物の場合は必然性が必要となります。)が、方針を共有すべき課題として考えられるものである。

以上が整備計画である。

5. 運営方針

拠点整備は建屋が構築されることで終了となるわけではない。そこで営まれるヒト・モノの経済が回るよう経営的視点を持った施設運営がとり行われる必要がある。

そのため、拠点整備にあたっては、設立当初から全体のグランドデザイン並びに6次化推進だけにとどまらず、人材育成・PRまでを兼ね備えた特定目的会社を設立し、施設の公共性と販売拠点としての収益性を追求する組織体制を構築することが望ましい。

施設運営にあたっては、費用の適正運用とランニングコストについて配慮し、赤字運営とならぬよう民間の経営手法がとり入れられることが求められる。一方で、設備や備品については、経年劣化や消耗による更新が適切に行われるように、施設の陳腐化を防ぐよう努力しなければならない。

(1) 地域版 DMO 創設

また、国は、地域の様々な地域資源を組み合わせた観光地の一体的な推進主体の創設を促し、これまでの観光協会に変わる新たな地域観光の旗振り役として DMO (Destination Marketing/Management Organization) の創設を推奨している。

日本版 DMO の創設

「様々な地域資源を組み合わせた観光地の一体的なブランドづくり、情報発信、プロモーション、マーケティングに主体的に取り組む」

なお、DMO には次のような種類が存在している。

○広域連携 DMO

・複数の都道府県に跨がる地方ブロックレベルの区域を一体とした観光地域として、マーケティングやマネジメント等を行うことにより観光地域づくりを行う組織

○地域連携 DMO

・複数の地方公共団体に跨がる区域を一体とした観光地域として、マーケティングやマネジメント等を行うことにより観光地域づくりを行う組織

○地域 DMO

・原則として、基礎自治体である単独市町村の区域を一体とした観光地域として、マーケティングやマネジメント等を行うことにより観光地域づくりを行う組織

※広域連携 DMO 及び地域連携 DMO の形成・確立にあたっては、連携する地域間で共通のコンセプト等が存在すれば、必ずしも地域が隣接している必要はありません。

出典：「日本版 DMO になるには」（観光庁）

こうした観光組織の法人化は、これまでも観光協会の法人化によって既に多くの自治体に取り組んでいる。DMOは何が違うのか、マネジメントやKPI（Key Performance Indicators：指標や目標）が設定されていて、PDCAに基づいて改善・改良を推し進めることがうたわれている。

わかりやすく言えば、これまでの「観光協会の法人化」とは、地域の観光資源をリスト化し、ストックとすることにとどまっていた。結果的に地域の観光資源を把握していたが、これが「活用」され、地域経済が回るように、リストが使われていなかった。

これからのDMOによる観光地域づくりとは、「観光資源」を有機的につなげることで、地域の経済活動を促すことに尽きる。それを具体的にすれば、魚釣りをしたい観光客に「貸船を紹介すること」であり、釣った魚を調理したい観光客に「持ち込み調理する料理店を紹介すること」である。こうした、地域の観光資源や店舗を観光ニーズに合わせて繋いでいくことで、地域経済を動かしていくことが、地域DMOにもとめらる「マネジメント」と言えるだろう。

この垂水市においても、観光協会を格上げし地域DMOとして法人を設立することが望ましい。当該組織は、経営的視点やデータ分析、さらには宣伝・PRも含めた地域観光を推進するとともに、今回整備される南の拠点の経営も担うことで、「稼ぐ観光組織」として垂水市の交流人口増加に伴う経済発展を牽引する存在になることが望まれる。

(2) 6次化産業のあり方と店舗運営

6次化といってもただ闇雲に1次産品を加工し、販売すればいいわけではない。商品開発にはプロセスが存在し、生産と販売のバランスをとった設備投資や収支計画を立案しなければ、経営的に成り立たない。

したがって、本拠点においては6次化を推進する1次産品の生産者、並びに材料を仕入れて加工しようとする2次加工業者、さらには販売拠点等を持ち、商品を企画し自ら販売する流通・小売りとそれぞれの企業体力と商品の市場価値を考慮した形で、商品の改善・改良が相談及び指導を受けられる教育組織を拠点のプログラムとして構築し、運用する。

具体的には、既に他の自治体も含め、6次化の商品を企画・製造・販売まで経験ある外部人材や県内企業の経営者との相談窓口や接点を設けることで、ノウハウや工夫を学ぶ機会を恒常的に設置するものである。また、食品の商品化に置けるあたらしい味やレシピを考案すべく、シェフや料理人を招いたレクチャーなど、多方面の人材を招聘し、6次化の付加価値創造のヒントをこの垂水市に居ながらにして学ぶことの出来る機会を創出する。

また、販売拠点の運営に関しては、地域の生産者や企業に「販売機会」が広く与えられる一方で、「売上の成果」については個々の努力が反映される形により、「売場の鮮度」が維持されていることが肝要である。そのため、拠点での商品販売にあたっては、「品質基準」を設けるとともに、一定の成果が得られない商品については、改善・改良を求め、「撤退基準」も設けることで、消費者の需要に合わせた新陳代謝が起こるような仕組みが運営にとり入れられることが求められる。

例えば、品質並びに売場からの撤退については次のような基準が想定される。

[品質基準]

- ・「野菜」など農産物は個包装化をすすめること
- ・「海産物」は鮮度基準を定め、売場に掲出すること
- ・「加工食品」は、細菌検査をクリアし、金属探知機にて不純物等問題がないこと
- ・「惣菜・飲食」は、地域性と季節性を盛り込んだ料理にすること
- ・「雑貨・民芸品」は、文化と技術をストーリーとして表現すること

[撤退基準]

以下の基準に該当するものは、売場からの撤退を促し、改良・改善に努めること

- ・「食品」：消費期限残存率が50%を超える場合または、1ヶ月の売上において、在庫率が50%を超える場合
- ・「雑貨・民芸品」：1ヶ月の売上において、在庫率が50%を超える場合

こうした売場そのものの鮮度維持を図ることで、経年劣化に拠る集客力の提言や商品力の低下を防ぎ、魅力ある拠点づくりを営んでいくことが望ましい。

(3) 人材と産業の育成

豊かな資源に恵まれた垂水市の農畜産物及び水産資源を活かし、新しい商品や企画を生み出す人材が生まれ続けることが、地域の活性化に繋がる。商品開発のシーズから、育成、成長・拡大に至るまで、商品販売のステージにあったリスクを適切にコントロールできるよう、販売拠点側での人事育成の支援メニューを豊富に取り揃えることで、地域から生まれる産業育成に寄与したいと考える。

具体的な施策として検討されるものは次の通りである。

■チャレンジショップでの試作販売：「商品は作ったが売れるかどうか、消費者がどのように感じるかテストマーケティングをしたい」また、「商売の経験がなく、まずは店で売ることを体験したい」といった起業のアーリーステージにおける当事者が、2週間など短い期間だけ店舗を借りてテスト販売できるショップを設置する。出店時の多額の投資や費用を必要とせず、商品の品質や精度向上のフィードバックを得られるため、企画を商品として魅力ある姿に変えていくプロセスをここでは費用負担を抑えて実現できる。

■市外・県外での販売拠点斡旋：当該拠点での販売が好調で、さらに鹿児島県内あるいは県外に飛び出てさらに売上拡大を図りたい企業に対し、次のような売場へのエントリーを紹介し、成長機会を提供する。

「鹿児島中央駅みやげ横丁」 「鹿児島空港ショップ」 「仙巖園ショップ」

「東京・大阪の主要百貨店」 「大手宅配チェーン」 「スーパー・コンビニ」等

(4) 拠点の将来像

拠点整備の将来像は、交流人口が増え、地域経済が潤い、雇用が生まれることで、垂水市に定住する人口が増えるという地域活性化の好循環サイクルを作ることにある。高齢化、人口減少が進む中で、好転させることはなかなか難しいが、自然減、社会減のダブルで減り続ける人口を緩やかな減少率にすることが、拠点整備が目指す将来像となる。

そのために、国が掲げる「ひと・まち・しごと」を有機的につなげる地域施策が求められている。政策の5原則を改めて確認し、地域が将来に向けて確実な一歩を歩んでいるか、常にPDCAのCHECK（確認・検証）と、Action（改良・改善）が進むよう努力しなければならない。

ひと・まち・しごと創生本部の政策5原則

- (1) 自立性（自立を支援する施策）：地方・地域・企業・個人の自立に資するものであること。この中で、外部人材の活用や人づくりにつながる施策を優先課題とする。
- (2) 将来性（夢を持つ前向きな施策）：地方が主体となり行う、夢を持つ前向きな取り組みに対する支援に重点をおくこと。
- (3) 地域性（地域の実情等を踏まえた施策）：国の施策の「縦割り」を排除し、客観的なデータにより各地域の実情や将来性を十分に踏まえた、持続可能な施策を支援するものであること。
- (4) 直接性（直接の支援効果のある施策）：ひと・しごとの移転・創出を図り、これを支えるまちづくりを直接的に支援するものであること
- (5) 結果重視（結果を追求する施策）：プロセスよりも結果を重視する支援であること。このため、目指すべき成果が具体的に想定され、検証等がなされるものであること。

この5原則を経営上の判断基準とし、物産・観光・経営・建設・広報・人材という地域の魅力を高める上で欠かせない6つの機能を常に改善し続けていくことが求められている。

6. まとめ

☑垂水市の魅力は、自然豊かで海と山に囲まれたこの土地の「自然」と「住む人」そのものである。

☑垂水市の南の拠点整備は、「交通結節点」であり、大隅半島のストック効果が期待できる「浜平地区」を対象としたエリアとする。

☑整備エリアは、レジャーや遊び、商業や観光、公園や憩いといった機能に合わせたゾーニングをし、生活から観光までスムーズな導線を構築する。

☑道の駅整備を基本としながら、魅力ある商品を開発する人材育成プログラムを通して垂水市の6次化を進め、観光客が欲する商品開発を進める

☑バーベキューからマリンスポーツまで、人が集う設備を通して交流人口の増加を図る。

☑地域と調和し、住民ニーズの世代を超えた交流と遊びを通して「定住人口」の定着、増加を目指す。

以上の通り、南の拠点整備は現状の課題解決を図る形で、整備計画が進められることを提案いたします。

7. 参考・資料・出典

○統計たるみず（平成 26 年度版）鹿児島県垂水市

○国土交通省 Press Release（平成 26 年 11 月 13 日）「東九州自動車道（鹿屋串良 JCT～曾於弥五郎 IC），大隅縦貫道（串良鹿屋道路）開通のお知らせ

○国土交通省 近畿道路整備局

<https://www.kkr.mlit.go.jp/road/stock/index.html>

○観光庁「日本版 DMO になるには」

http://www.mlit.go.jp/kankocho/page04_000049.html

8. 添付資料

- (1) 全体俯瞰イメージ図
- (2) 拠点レイアウト 1000 分の 1 サイズ
- (3) 拠点レイアウト 1000 分の 1 サイズ拡大版
- (4) 拠点レイアウト 400 分の 1 (建屋配置)
- (5) 拠点シーンイメージ (売場)
- (6) 拠点シーンイメージ (広場)

以 上